様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２５日現在

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：１８３２００１７
研究課題名（和文）　瑜伽行学派における大乗仏説論の思想史的研究－『大乗荘厳経論』を中心に－
研究課題名（英文）　A Study of the Yogācāra Doctrine of Mahāyāna as Buddhavacana from a Historical View Point --- Focusing on the Mahāyānasūtrālaṁkāra ---

研究代表者
芳村　博実　(YOSHIMURA HIROMI)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：00201062

研究成果の概要：「何が仏説か」という問いは大乗経典の登場によって部派仏教徒から初めて投げかけられたものではない。仏滅後徐々に増大していった初期経典のなかに「善説」であれば「仏説」であるという考えが登場し、アビダルマの学僧たちによって「法性に違わなければ仏説である」と定義されたのを受けて、大乗仏教徒たちは「大乗仏説論」を確立することができた。『大乗荘厳経論』第１章は、最も完成された「仏説論」を展開している。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	**2,800,000**	**840,000**	**3,640,000**
2007 年度	**2,700,000**	**810,000**	**3,510,000**
2008 年度	**3,100,000**	**930,000**	**4,030,000**
年度			
年度			
総　計	**8,600,000**	**2,580,000**	**11,180,000**

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学
キーワード：大乗荘厳経論、大乗仏説論、瑜伽行唯識学派、無着、梵語仏典校訂・翻訳

１．研究開始当初の背景

（１）戦後日本を代表する仏教学者であった京都大学名誉教授・学士院会員長尾雅人博士（1907-2005）は、長年にわたって龍谷大学大宮学舎においてご専門の唯識仏教の諸論書の読書会を開催しておられた。その中から『摂大乗論 和訳と注解』全 2 巻　（講談社インド古典叢書、1982 年・1987 年）が生まれたのであるが、晩年は『大乗荘厳経論』を読んでおられた。長尾先生の没後は、先生がパソコン上に残された同書全体にわたる「研究ノート」を手がかりに、研究分担者である荒牧典俊博士を中心に研究会を続けてきた。

（２）一方、長尾先生がパソコン上に残された「研究ノート」はご遺族の手によって整理され、『大乗荘厳経論』和訳と註解』として、徐々に自費出版されつつある。全４冊のうち、最初の３冊が 2007 年 3 月、12 月、2009 年 3 月にそれぞれ出版されている。第４冊も本年中に出版される予定である。

２．研究の目的

（１）初期瑜伽行唯識学派の代表的な論書である『大乗荘厳経論』のコアとなる第 1 章、

第 9 章、第 17 章など数章の梵文テキストの批判的校訂を複数の写本を参照して作成し、該当箇所の翻訳と訳注を作成する。

（２）同書第１章の中心テーマである「大乗仏説論」を初期仏教、アビダルマ仏教、大乗経典、中観思想、唯識思想など様々な視点から思想史的に解明する。

３．研究の方法
（１）学期中の毎週木曜日夕刻約３時間継続して読書会を行ってきた。長尾先生が入力され、ある程度校訂されたテキストを底本として、研究協力者である藤田祥道らが写本の写真を参照して異読を確認した。

（２）荒牧典俊が前もって用意した独自の和訳を発表し、それを参加者全員が検討した。その結果合意を得た翻訳を記録し、複数の異なる解釈が存在する場合はそれを明記した。訳注に関しては、分担して作成した。

（３）この三年間にハンブルク大学名誉教授ランベルト・シュミットハウゼン教授、同大学マルティン・デルハイ博士など海外の唯識研究者が長期にわたって読書会に参加され、多くの有益な示唆を得た。

（４）本研究プロジェクト参加者のそれぞれのバックグラウンドにもとづく「大乗仏説論」に関する思想史的研究に関しては、自主的な研究に任せたが、この面で最大の貢献をなしたのは、いかに述べる藤田祥道の研究であった。

４．研究成果
（１）『大乗荘厳経論』第１章「大乗の確立」に関しては、批判的校訂と和訳・訳注を完成し、研究分担者である能仁正顕が編集し、『大乗荘厳経論第１章の和訳と注解　大乗の確立』として、本年７月自照社（京都）から出版される。本章に関しては、後に詳述するように、研究協力者の藤田祥道の「『大乗荘厳経論』における大乗仏説論の研究」という学位請求論文として結実した。

（２）『大乗荘厳経論』第９章「菩提」に関しても、既に批判的校訂と和訳を完成している。これも早期に公刊したいと考えている。本章に関しては、研究協力者の内藤昭文が「MSA の構成と第 IX 章「菩提の考察」章の構造」と「MSA 第 IX 章「清浄法界の六義」の理解」という２論文を完成し、本年中に『インド学チベット学研究』第 13 号において公表される予定である。

（３）『大乗荘厳経論』第 17 章「供養」に関しては、その批判的校訂と和訳をほぼ終えているが、引き続き読書会を継続して、完成したいと考えている。

（４）研究代表者である芳村博実は、楠淳証編『唯識　心の仏教』（自照社）を共著で刊行した。研究分担者である早島理は、『仏教思想の奔流』（自照社）を共著で刊行し、「大乗仏教の人間観―瑜伽行唯識学派を中心に―」を寄稿した。

（５）研究分担者である荒牧典俊、早島理、桂紹隆は、2007 年 12 月中国広州の中山大学で開催された国際学会「唯識学思想与東亜仏教伝統研討会」で唯識に関する研究発表を行った。桂はさらに、2008 年６月米国アトランタで開催された第 15 回国際仏教学会で研究発表した。なお、藤田祥道は、東方学会発行の英文雑誌 Acta Asiatica の最新号に博士論文のエッセンスを寄稿している。このような形で、研究成果を海外に発信することに努めた。

（６）最後に、先行研究と、主として藤田の研究にもとづき、「大乗仏説論」に関する思想史的研究の成果の一部を記しておく。

仏滅後直ちに五百羅漢が集まって、アーナンダを中心に「経蔵」がウパーリを中心に「律蔵」が「結集」され、釈尊の教えの正確な伝承は数度の「結集」によって再確認されたという伝承は広く受け入れられているが、近年の初期経典の綿密な文献学的研究の結果、最古の仏典として広く承認されている『スッタニパータ』でさえ、中谷英明によれば、数百年の年月をかけて徐々に成立したことが立証されている。また、オスカー・ヒンニューバーによれば、尼僧教団の成立は伝承に反して明らかに仏滅後の出来事であるという。
かくして、われわれの保持する初期経典（ニカーヤと阿含）も律蔵も釈尊の時代、原始仏教教団の時代から、数百年を経て徐々に形成されたものと考えなければならない。すなわち、伝承されているある特定の仏典が「仏語」であるか否かは、いや「仏語」でないことは、その仏典を作成した仏教徒にとって自明のことであったに違いない。

経蔵と律蔵に加えて、特定の作者を有し、

経典に説かれた仏説の理論的解明と組織化を試みるアビダルマの諸論書が「論蔵」として仏典のコーパスに加えられたとき、問題は頂点に達したに違いない。初期仏教の諸部派によって与えられた一つの解決策、仏語であるか否かを決定する一つのメルクマークは、これら経・律・論の「三蔵」に含められているか否かであった。

ところが、論蔵よりも経蔵こそが仏教教義を決定する最高の基準であると説く経量部に対して、論蔵の優越性を強く主張した説一切有部のアビダルマ論師たちは、一見仏滅後の個々の仏教学者が著したとされるアビダルマ論書も釈尊が説いた真理（法性）を説く限りは「仏語」と見なすことができるという画期的な基準を提唱するに至った。このことは、『大毘婆沙論』の記述にもとづいて本庄良文によってはじめて指摘されたことであった。

さて、大乗仏教の諸論書で「大乗仏説論」が展開されていることはよく知られている。中観派のバーヴィヴェーカ（清弁）の『中観心論』における「大乗仏説論」はつとに野沢静証によって紹介された。さらに、プラジュニャーカラマティの『入菩提行論・細注』第９章にも詳細な「大乗仏説論」が展開される。これに対して瑜伽行唯識派では、『大乗荘厳経論』第１章の「大乗仏説論」が著名である。

藤田は、『大乗荘厳経論』第１章の「大乗仏説論」を解明する為に、その思想史的背景を大乗経典、さらに初期経典にまで遡る。

大乗経典や部派アビダルマの仏説・非仏説が論議されるとき、外的基準にもとづくものと内的基準にもとづくものとの二つの考え方が見られる。前者は、仏典結集の伝承にもとづく仏説観、つまり、釈尊在世時に釈尊によって語られ、仏滅後ただちに仏典結集によって保存された経と律が仏説であるというものである。これに対して後者は、仏説であるか否かはそうした外的・形式的な基準によっては判断されず、ただ教説の内容が仏説というのにふさわしいものであるか否かによって判断されうる、という考え方である。

部派のアビダルマや大乗経典は、旧来の初期仏典(経と律)の外に展開したものであるから、それらが仏説であることの根拠は当然のことながら後者に依らなければならない。しかし、そうした内的基準にもとづく仏説観は、既に原始仏典において見られるものである。

初期仏典においてこうした内的な基準にもとづく仏説観が形成された背景をたどると、従来の初期仏典に対する一般的理解をくつがえすものである。すなわち初期経典とは釈尊のことばの口伝記録であるばかりでなく、仏弟子等の説法をも「仏説」として収録したものであり、そこには「仏の登場しない経」の存在に端的に象徴されるように、仏弟子たちによって展開された仏教が仏説として承認されてゆく過程が窺われる。

こうした「仏語」の増大に呼応して、初期経典には、なんであれ「善説」ならば仏語とみなしてよいという言説が見られることになる。ただし、このことは仏滅後に仏弟子たちが際限なく自らの思索を仏説として編入していったことを意味するわけではなく、そこには仏弟子等による新しいことばや思索が仏説として承認されるべき基準というものが形成される必然性があった。「善説経」と称される初期経典は「善説」を定義して、「涅槃に結び付く真理のことば」が善説であるとみなす。

「経に入り、律に見られる」ものならば仏説であり、そうでないならば仏説ではないという「仏語」の外的基準に対して、説一切有部や法蔵部は「法性等に反しないものならば仏説である」という項目を加えている。これは初期仏典における仏説の増大からすれば決して逸脱とはいえないのである。そして、この新たな「仏語」の定義は、大乗経典を仏語として正当化する際にも十分力を発揮したのであった。

「涅槃等の究極的な宗教的目的に結び付く真理のことば」、あるいは「法性に反しないことば」ならば仏語であるという初期経典に示された仏説観・聖典観が、アビダルマや大乗経典という新たな仏説・仏語を展開させる根拠となったことは、それぞれの文献からも確認できる。インド仏教において「仏説」とは、それが涅槃や仏の無上智という究極の目的に結び付く真理のことばとして機能するように、常に状況に応じて説き改められるべきものであると理解されていた点がある。ただし、それは旧来伝承されてきた仏説の権威を否定するものではなかった。

以上のような「仏語観」が、大乗経典や論書においては、『般若経』―『迦葉品』―龍樹―『菩薩地』―『解深密経』―『大乗荘厳経論』という順で発達して行ったことを跡づ

けることができる。そして、』―『大乗荘厳経論』第１章において最も発展した「大乗仏説論」が完成されたと言える。同時に、後者の意図するところを性格に理解する為には、初期仏教経典から大乗経典、大乗論書までの長い思想史をたどる必要があるのであった。

「仏説論」をめぐるインド仏教思想史をたどるなかで、藤田が提出したもっとも興味深い考察は、大乗仏教だけでなく部派仏教にも仏道を追求する菩薩の観念が存在したことを推理したことである。それは、般若経典の中でも、特に古いものとされる『八千頌般若』において、「智慧の完成を誹謗する菩薩」や「智慧の完成を恐れる菩薩」というカテゴリが登場することにもとづくものである。これは従来の「菩薩観」に発想の転換を迫るものである.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１３件）
① 藤田祥道、「大乗の諸経論に見られる大乗仏説論の系譜 IV――『大乗荘厳経論』：総括と展望――」、インド学チベット学研究、（査読無）、第 12 号、2008、pp.1-39.

② 藤田祥道、「大乗の諸経論に見られる大乗仏説論の系譜 III――『解深密経』：三無自性という一乗道の開示――」、インド学チベット学研究、（査読無）、第 11 号、2007、pp.1-30.

③ 芳村博実、「複数の唯識説―『大乗荘厳経論』の例―」、印度学仏教学研究、（査読有）、第 54-2 号、2006、pp.24-30.

④ 藤田祥道、「大乗の諸経論に見られる大乗仏説論の系譜――II．『迦葉品』：仏陀の説法とその理解」、仏教学研究、（査読有）、第 60・61 号、2006、pp.44-65.

⑤ 藤田祥道、「大乗の諸経論に見られる大乗仏説論の系譜――I．『般若経』：「智慧の完成」を誹謗する菩薩と恐れる菩薩――」、インド学チベット学研究、（査読無）第 9・10 号，2006、pp.1-55.

〔学会発表〕（計４件）
① 桂紹隆、Trace of Apoha Theory in Kui-ji's Cheng-wei-shi-lun-shu-ji、第 15 回国際仏教学会、2008.6.29、エモリー大学（アトランタ、USA）

② 荒牧典俊、The Ontological Philosophy of Mahāyāna Buddhism --- from Nāgārjuna to the Sandhinirmocanasūtra、唯識学思想与東亜仏教伝統研討会、2007.12.9、中山大学（広州、中国）

③ 早島理 On a Buddha-kāya Theory in the Hsien-yang-sheng-chiao-lun by Asaṅga、唯識学思想与東亜仏教伝統研討会、2007.12.9、中山大学（広州、中国）

〔図書〕（計４件）
① 能仁正顕（編）、自照社、『大乗荘厳経論第１章の和訳と注解　大乗の確立』、2009.7、197 頁

② 芳村博実、インド唯識におけるヨーガの実践、自照社、楠淳證編『唯識 こころの仏教』、2008、400頁（pp. 3-34）

③ 早島理、大乗仏教の人間観―瑜伽行唯識学派を中心に―、自照社、『仏教思想の奔流』、2007、340 頁（pp. 3-124）

６．研究組織
(1)研究代表者
芳村　博実(YOSHIMURA HIROMI)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：00201062

(2)研究分担者
荒牧　典俊(ARAMAKI NORITOSHI)
京都光華女子大学・真宗文化研究所・所長
研究者番号：30027536

桂　紹隆(KATSURA SHORYU)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：50097903

早島　理(HAYASHIMA OSAMU)
滋賀医科大学・医学部・教授
研究者番号：60108272

能仁　正顕(NONIN MASAAKI)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：70290210

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者

内藤　昭文(NAITO AKIFUMI)
龍谷大学・法学部・非常勤講師

藤田　祥道(FUJITA AYOSHIMICHI)
龍谷大学・文学部・元非常勤講師

乗山　悟(NORIYAMA SATORU)
龍谷大学・理工学部・非常勤講師

那須　良彦(NASU YOSHIHIKO)
龍谷大学・文学部・非常勤講師